

2021年4月18日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 鳥居良基

奏楽

前奏

招詞

フィリピの信徒への手紙 第2章9節～11節

讃美歌

讃美歌 21-3 (扉を開きて)

交読

詩編 第61篇 (p. 65)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第14章10～21

(新約聖書 p. 91)

讃美歌

讃美歌 21-329 (目覚めよ、歌えよ)

説教

「心痛める者」

時は過越しの祭りのときです。これは、イスラエルの人たちが、みんな同じ神さまの救いにあずかっている、神の民に生かされている者どうしなのだということを、誰もが漏れない

ように確認する食卓の交わりを作る時でした。イエスさまもひとりのユダヤ人として、この過越しの食事を大切になさいました。これまでもエルサレムに出る機会があれば、喜んで過越しの祭りに参加され、その食事をとても大切になさったはず  
です。

この過越しの食事が行われたのは、どんな席だったのでしょうか。「**席が整って**」(15節)とあります。もう少し別の訳し方では「敷物が全部敷いてある」、もう敷物がきちんと敷いてあるとなります。そこではイエスさまと12人の弟子、つまり13人がぐるりと食卓を囲んでいます。当時の食事のマナーでは、横になって食事を摂った。左側を下にして肘をつき、右手を自由にした状態で、その右手で食べ物をつまんで食べたようです。13人が横になれば、それなりの広さが必要となってきます。この場所を提供したのは誰か。よくわかりません。ただ水がめを運んでいる男性であったと、13節にあります。この水がめというのを、当時イエスさまが使っておられた言葉で言う

と、マルコスと言います。後にそこからひとつの想像が始まりました。マルコス、エルサレムに大きな広間を持っているマルコス、使徒言行録に出てくるあの男性のことではないだろうか。たとえば使徒言行録第1章には甦られたイエスさまが、弟子たちとエルサレムで40日の間過ごされたその後の事として、こう書かれています。1章13節。「**彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった**」。弟子たちが一緒に泊まっていた家があり、その二階の部屋に集まった。更に15節には、120人ほどの人がひとつに集まっていた。いつも使っていた、この二階座敷は、ずいぶん広い部屋だったと考えられます。この二階座敷の家が、いつもエルサレム教会の集会場所になっていたことは、どうも明らかなようで、この後、使徒言行録の記事を見ますと、そうではないかと思えるような記事が出てきます。今は一つだけ、注目したい言葉をご一緒に見ていきます。

使徒言行録第12章12節です。これは、使徒ペトロが伝道をしていた時に捕らえられ、牢に入れられていた時のことで

す。「こう分かるとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには大勢の人が集まって祈っていた」。ペトロが捕らえられている間に、人々が集まって、ペトロ先生のために祈祷会をしていた。その会場となった家が、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家だった。当然、マルコの家でもあったわけです。おそらくこのお母さんのマリアという人が、エルサレムの教会では、今風に言えば、婦人会の会長をしているような立場の人だったのかもしれませんが。弟子たちの世話を一所懸命していた、その祈りをしている場所に、牢から解き放たれたペトロが、訪ねて行く様子が描かれています。そのマルコという人が、もしかするとここでも水がめを運んでいる人として登場しているのではないかと言われます。

こうしたことは想像ですし、証拠はありません。けれど、楽しい想像だと思います。エルサレムに、多くの教会の者たちが集まって集会ができるような家、信仰をもって提供してくれる人は少なかつたらうと思います。そこに、エルサレム

の仲間たちがみんな集まって、何よりも最初は、毎日喜んで祝ったに違いないのは、この食卓、晩餐です。まだ初めはペトロたちが生きていた。ペトロたちが死んでからも、思い出が語り伝えられる。この部屋で、イエスさまが食事をなさった。イエスさまが食事をしてくださった。ここでイエスさまが、あの最後の晩餐をしてくださった。それは生々しい記憶であったし、心深く刻まれていた思い出であっただろうと思います。

さらに想像をたくましくして言えば、ヨハネによる福音書では、イエスさまが甦られた後、弟子たちは、まだおびえていて、エルサレムのどこかの家に閉じこもっていた。甦られた日の夕方になって、イエスさまは、弟子たちが一所懸命閉ざして、かんぬきでも掛けていたかもしれない扉を抜けて、弟子たちのところに来て、「**平安があるように**」とおっしゃってくださいました。二度もおっしゃってくださいました。これも忘れられなかったと思います。イエスさまが亡くなる前にしてくださいました晩餐の思い出だけではない。そのイエスさまが甦られた。そして、

甦りになったイエスさまがおそらくその家においても、弟子たちと一緒に食卓を囲んでくださった。生きて甦りになった主イエスの食卓の思い出もありました。これは、確かにひとつの想像です。けれど、もし、そのエルサレムでの最後の晩餐の行われた家と、ヨハネ、マルコ、その母マリアの家とが別でも、後に教会が、この食卓を囲む群れとして作られたことは間違いのないことです。そのエルサレムで、そういう食卓の群れが作られました。たとえ、場所が変わっていたとしても、この主の最後の晩餐の出来事は深い思いをもって、何度も繰り返し思い返されたに違いありません。

しかも、それはただ楽しかったねという思い出ではありません。お祭りの食卓、お祝いの食卓といえ、それ自体すでに忘れられないものだと思います。ところが、ここでは、ただそれだけのことではありません。弟子たちにとって、それは深い痛みを思い起す時でもありました。イエスさまが、その食卓で何を言われたかという、裏切りの予告だったからです。

イエスさまがまず語られたのは、あなたがたの中に、わたしを裏切る者がいるという言葉でした。「弟子たちは心を痛めて、『まさかわたしのことでは』と代わる代わる言い始めた」。

心を痛めた、心を悲しませた、悲しみに捕らえられた、どう訳していいかと思います。この時イエスさまは、「わたしと一緒に食事をしている者」と言われ、あるいは20節で「わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者」という言い方をなさいました。

同じ食卓につくということ、それ自体がとても深い交わりを意味します。「一緒に鉢に食べ物を浸す」。いろいろな説がありますが、興味深い理解があります。いろいろな専門的なことを考えるよりも、これは今風に言えば、「同じソースをつけて食べた」という意味だ。今コロナ禍にあるわたしたちは、そういうことはできなくなりましたが、以前なら、例えば、同じ醤油をつけて、食べた仲間という意味だろうと思います。たとえば、お客さんを招いてお醤油の小皿を出して、その数が足りなければ、お客さんにはちゃんと小皿を渡しますが、家族であれば一緒に使おうと言って同じ小皿から付けて食べることがあるだろ

うと思います。それは余程気心知れた人でないとそこまではし  
ません。それほどに深い交わりの中に裏切りが芽生えている。  
いや、ここでそれが実現するとイエスさまは言われます。

更に、このイエスさまのお言葉の背後にあるものとして  
誰もが考えるのが、詩編の第 41 篇です。その 10 節に「わたし  
の信頼していた仲間、わたしのパンを食べる者が、威張ってわ  
たしを足げにします」。「わたしのパンを食べる者」、これは一緒  
に食事をしている者という意味です。しかももう一步踏み込ん  
で言えば、もしかするとこの「わたしのパン」というのには、  
こういう意味があるかもしれません。2 節に、「いかに幸いなこ  
とでしょう、弱いものに思いやりのある人は」と書いていま  
す。おそらくある程度の財産もあり、しかも、広い豊かな愛に  
生きている人がいた。弱い者へ思いやりがあったから、食べる  
ものに困った人に、パンを分け与え、その人たちと一緒に食卓  
につくことを喜びとしていた。そのパンを食べさせてもらって  
いる者が、今は威張って足げにする。おそらく力関係が逆転し



ているのかもしれない。少なくとも、ここでは「病の床」という言葉が4節にあるように、その人が病気になってしまったようです。その病のために衰え、力を失っている者を足げにする人が出てくる。

この「パンを食べる者」というのを、10節では「わたしの信頼していた仲間」と言っています。「わたしの信頼していた仲間」というのをそのまま翻訳すると、「わたしのシャーロームの人」という言葉です。シャーロームとは「平和」という意味です。ただし、ここではお互いに「平和を」と挨拶できるような仲間という意味に留まりません。もっと深い意味があります。そこにある平安は、もっと確かなものです。だからここは、契約に基づく絆、信頼関係が、お互いをしっかり結びつけている、そんなふうにお互いに知り合っている仲間という意味だ。「契約」といっても、これに背いたら罰金を支払うという契約ではなく、心の契約です。わたしは、あなたを死ぬまで信頼し切って生きていくから、お互いに絶対に裏切ることはない。

夫婦の契約のように深い。ここではまさに、信仰に根ざす。神の民としてふさわしい確かな、お互いの交わりの約束に生きている者、それ人が、今わたしを足げにするというのです。

イエスさまは、この詩編の言葉を引用しながら、ご自分と弟子たちの関係を語られる。わたしたちにとっても、信頼関係はとても不確かなものです。わたしたちが何に日常的に一番傷つきやすく、また実際に深く傷つくかというと、人間関係ではないか。おそらく裏切られた体験が一度もない人はいないだろうと思います。この人は、自分にとってこういう人だと信頼し切っていたものが、裏切られてどうしようもない思いになるのが、わたしたちのいつも見る人の姿です。けれど、ここでは、そんなふうにも見られるような人間の姿が、イエスさまと弟子たちとの関係においても現れたのだ、というのんきなことではありません。少なくとも、聖餐の食卓において、主イエスと共に食卓にある弟子たちが、裏切り者を出した。弟子たちは忘れなかったはずです。自分たちは、主イエスを裏切った

仲間を出した。でもそれだけではない。12人の一人が裏切ったというだけではない。あなたがたの中に裏切り者がいると言われたときに、みんなびくついてしまって、まさか、イエスさま、わたしではないでしょうね、と尋ねた。確信はない。突き動かされるものがあったと思います。自分たちにひそむ不確かさ、隠された裏切りの心に気づいています。そして、この時は何とか裏切らないですんだとしても、弟子たちは、もうやがてほんの僅かの中に、すべての者が、イエスを捨てて逃げたことを痛い思いをもって、思い起したに違いありません。みんな、誰もが契約を捨ててしまった。イエスさまを独りにしたのです。十字架の上に独りで残してしまったのです。

受難週の人に歌われる讚美歌の中に、黒人霊歌をもとにした讚美歌があります。306番の「あなたもそこにいたのか」。もしこういう歌を弟子たちが聞いたらどうだったでしょうか。おそらく弟子たちは耐えられなかったのではないか。あなたはあの時どうしていたのかと問われるからです。主イエスを捨て

ていたからです。

そして、たとえそういう歌を聞かなくても、聖餐にあずかるたびに、弟子たちは心のうちで深く問われた。主イエスが十字架につけられたとき、あなたはどこにいたのか。その問いを思い起さないわけにはいかなかった。では、主の食卓にあずかること、教会の礼拝が、その交わりが造られたのはどうしてなのか。それは、そうしたとても痛い悲しい思いを包み込んでしまう出来事こそが、また恵みの食卓であった、ということをも確信していたからではないでしょうか。

たとえば何でもないことのようにですが、10節、「イエスを引き渡そうとして」とあります。ここをなぜ「イエスを裏切ろうとして」と書かなかったのだろうか、と考える人がいます。一つは、明らかにイエスさまが何度もご自分の受難を予告なさった時に、この言葉が使われたからです。たとえば「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される」(9:31)と語ってお

られます。これは何度も繰り返される言葉です。ですから、ここは、ユダが裏切ったということよりも、イエスさまがおっしゃっていたとおりに、ユダが、イエスさまを引き渡す決心をしたのだということをマルコ福音書は語りたかったのだ。ユダの心は、イエスさまがもう見抜いておられたのであって、しかもイエスさまは、ユダの裏切りの行為の背後に、父なる神のみこころが働いていることを信じておられた。だから、何でもないことのようにだけれど、「イエスを引き渡そうとして」というのは、神さまのみこころに従ってという意味さえ込められていると言います。

ユダの背後に、神が立っておられるということは、これは畏れることです。けれど、とても深い意味を持っているではないか。同じように、この晩餐の食卓も弟子たちが用意したのではない。でもきっと食べ物も弟子たちが一所懸命準備しただろう。けれど、どこで食事をしたらいいかわからない。イエスさまに相談すると、もう準備万端整っているとと言われる。主の

食卓につくたびに、弟子たちが思い起したことは、もうひとつ、そのことではなかつたらうか。これは、自分たちが準備したのではない。イエスさまが準備してくださった。主が備えてくださった食卓である。それは、その後エルサレムのその家で、何度繰り返しても同じ思いで受けた聖餐の恵みだったと思います。これはイエスさまが用意してくださった食卓だ。そう信じて晩餐につきました。わたしたちの聖餐の食卓も同じです。

先月、頼まれていたある原稿の中でエフェソの信徒への手紙から引用した言葉がありました。「**神の霊を悲しませない**」(4:30)。これは信仰生活のひとつの鍵ではないかと思っています。毎日生きていくときに心に刻みたいことは、神さまの聖なる霊を悲しむようなことはしてはいけないということです。こんなことを言い、こんなことをしたら、神さまが、また悲しむと思われることをしてはいけないということです。神を愛するということであれば、相手を悲しませないこともまた愛するこ

との一つのかたちだと思うからです。そしてもう一つ、それは、すでに、神は深く悲しまれたからです。キリストにおいて深く悲しまれたからです。弟子たちの心の痛みよりも、もっと深く痛みを覚えられたからです。ユダの裏切りをも、ご自身の痛みとしておられたに違いありません。自分を裏切るような者は、生まれなかったほうがよかった。主イエスはそのように言われました。これはユダだけのことではないとわたしは思っています。わたしたちのことではないのか。そのわたしたちが、生まれて来てよかった、と言えるようになるために、弟子たちが、一瞬覚えたような痛みよりもはるかに深い主イエスの痛みがありました。

その意味においては、わたしたちのいのちは、主イエスの痛みと深く結びついています。すべてのことを、わたしたちに先立ってやり遂げてくださり、全部準備を整えて、さあここに来なさい、ここにいのちが確かに生きると言ってください、主のみわざをただ恵みとして受け取るだけです。いいえ、主が





主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と  
聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>